

2003年10月20日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニュースレター

2003年度総会は快晴の10月4日(土)甲南大学で開催された。参加者は60名、会場前のピロティには恒例のように *The War of the Unstamped*, *The History of the Times*, *The Minerva Press*, *A Study of Bentley Papers* など、19世紀の雑誌・書籍の出版および出版社史が展示された。

支部長の開会挨拶では、ディケンズ研究の面白さとともに、研究の枠を打ち破る脱線の効用もまた説かれ、上記展示に関して、たとえば印紙を張らずに定期刊行物を出版した Henry Heatherington の逸話、そしてまた「新救貧法」反対の立場を表明した「タイムズ」社長にたいしオルトラップ卿が宣戦布告を示唆する走り書きが『社史』に綴じられていることなどが述べられた。そして出版事情にむかって少々脱線してみれば、思わぬところでディケンズと結びつく面白さと広がりのあることが披露された。

以下、総会の審議事項と研究発表・講演内容について報告いたします。

総会

青木副支部長の司会のもとに西條支部長が議長をつとめ、議事が進められた。

1 総会議事

(1) 2003年度会計報告・監査報告 【可決】

別紙のとおり田中財務理事による会計報告および松村監事による監査報告があり、2002年度決算は満場一致で可決された。

引き続き、2004年度の年会費については本年度と同じ6,000円に据え置くことが提案され、了承された。

(2) 『ディケンズ鑑賞大事典』(案)の刊行 【可決】

[趣旨説明] 1300人をこえる個性豊かな人物を創造したディケンズは、その想像力の豊かさとしてストーリー・テリングの巧みさは言うに及ばず、小説の醍醐味を追求しつづけた作家であった。その比類なき作家活動のほかにも演劇活動、公開朗読、雑誌編集、社会活動に超人的な足跡をのこした。しかし、日本には大作家の実像を伝える書物がなく、作家像ですら十分に認識されるにはいたっていない。そこで多岐にわたる彼の活動を正確に伝える『大事典』を日本支部の総力を挙げて刊行し、ディケンズの偉大さ、すばらしさ、面白さを広く理解してもらいたいと願うのである。ついては、これまで積みたてられ有意義な使用方法の検討をゆだねられていた預貯金のうち、300万円以内を用いて表記書物を出版したいとの提案がなされた。

a. 構成は作品鑑賞および作家像を主とし、作家に関する資料・情報に関してはCD-Romを付録とすることで補う。

b. 刊行時に、会員にたいして特別料金で提供する。

c. 原稿料は無料とする。万一印税が発生した場合は日本支部への寄付とする。

d. 刊行予算が300万円を超える場合、執筆者の負担もありうる。

以上の提案は審議の結果、満場一致で可決された。

(3) 2004年度総会

ディケンズ・フェロウシップとギヤスケル協会との共同開催とし、日時は10月3日(日)、会場は大手前大学にておこなう。詳細については理事会で検討する。 【可決】

(4) 諸報告

a. 『年報』26号の編集は11月初旬に刊行・発送の予定。

b. 来年度の春季大会については交渉中です。わかり次第連絡いたします。

c. Dickens Fellowship International Conference の予定。

2004	Melbourne	July 15-22
2005	Canterbury	July 28-August 2
2006	Amsterdam	July 27-31
2007	Philadelphia	July 19-24

d. Yamamoto, *Growth and System of the Language of Dickens* (2003) が溪水社よりリプリントされた(¥8,000)。

2 研究発表 (14:45-15:20)

廣野由美子氏(京都大学)の司会で、木原貴子氏(名古屋女子大学)による「ヴィクトリア朝の女性挿絵画家」の発表があった。木原氏は多くの雑誌・児童文学に挿絵を描いた Mary Ellen Edwards (1839-1910) を取り上げ、Kate Greenaway (1846-1901) の挿絵と比較しつつ、その特徴を語った。文献にほとんど出てこない画家であるだけに、興味は尽きなかった。

3 特別講演 (15:30-16:20)

青木健氏(成城大学)司会のもと、植木研介氏(広島大学)は「ディケンズのクリスマス特集号と雑誌編集」と題して、ディケンズのクリスマス特集号が普通号の増ページ体裁から独立した別冊に発展してゆく過程を詳細なデータを用いて語った。講演では「Somebody's Luggage」(1862)に焦点を絞り、その構成と展開を編集者ディケンズが「conduct」していくなかで、作家ディケンズの内的側面・私的側面が垣間見える面白さを指摘された。

4 特別講演 (16:35-17:45)

原英一氏(東北大学)の紹介と司会を受けて、Dr. Adrian Poole (Cambridge University) は「The Martyr in Dickens」と題してディケンズ作品の中に使われる「martyr」の意味を詳しく分析された。私たちが普段見逃しがちな anti-martyrdom (=self-pity), abandoned martyrs (=sufferers, victims) を豊富な引用を挙げながら説明し、大義を持たぬまま犠牲にさらされる孤独な受難者たちを浮き彫りにする一方、人々の目にはっきりと大義のために犠牲となり、かつ作品の中心的地位を占める「martyr」として Joe, the crossing sweeper と Sydney Carton を挙げた。後者は *Frozen Deep* (凍結された心の奥底をも意味する) の上演から生まれてきたこと、そして彼の最後のつぶやきが劇的な「martyr」像、いや作家自身の self-pity をドラマタイズしていると強調された。最後に、ディケンズは「martyr」を証言する点においてとりわけ優れていると述べて講演を終えた。内容も語りも好印象を刻む講演であった。

5 懇親会 (18:10-20:00)

40名が参加し、松村昌家先生の発声で楽しい交歓の語らいが始まった。会場では Professor Rycroft (甲南大学) による「Rule Britannia」の紹介と解説があり、二、三度歌った後これを全員で合唱した。

お知らせ

- 1 2004年度(2003.10~2004.9)の年会費6,000円を同封の振込用紙にて12月末日までにお支払い下さいますよう、お願いいたします。
- 2 『年報』27号への投稿論文を募ります。投稿規定は『年報』に記載された通りです。
- 3 Melbourneで開催される Dickens Fellowship Conference の参加申込書が本日届きましたので同封いたします。奮ってご参加下さい。